

# 現地で終戦をむかえて

青柳 卯之助

上高田五丁目

## 終戦

八月十五日の無条件降伏の玉音放送は、通信関係の部隊が傍受して極秘にされていたが、各隊それぞれに通信機器があるので、放送内容が明らかになってからは、来るべき時が来たと受けとめていても、日本本土の状況が正確に伝わるようになってからは、広島・長崎に原爆投下の惨状、各都市の焦土化、無条件降伏の調印、米軍の進駐、支那派遣軍の復員開始等の現実直面して、敗戦のショックは増幅され、無敗の戦力を誇示していた南方軍も、大勢に順応のやむなしの結論に至り、復員の準備にとりかかることになった。

第五師団は広島を管区とする部隊であるから、広島出身者が多く、想像を絶する広島原爆投下の惨状を知り、出身者の苦悩は計り知れず、敗戦の虚脱感と共に帰心矢の如く、一刻も早い復員が望まれたが、船舶全滅の状況下では如何ともなし難く、アジア全域に散在する数百万の人員を限られた船舶で輸送するには、相当な日時を要するのは自明の理で、国の復員方針は米

軍のリバティ船を主力に、中国大陸からの輸送を第一優先に、フィリピン、東南アジア、南方島嶼しよの順と知り、最後尾の配船では輸送船がくるのは、一年位あとになると予想され、その間は指揮系統を乱すことなく、整然と待機することになったので、集積しておく必要がなくなった戦用食糧は、各隊の人員に応じて給付し、現地自活の耕作物と総合した長期食糧計画を立案して、各隊に下達した。

第五師団は、日清・日露戦争の派兵基地であった宇品港があることで象徴される軍都とまで言われた、日本陸軍の命運を握る広島の師団で、質実剛健な精銳師団として知られ、支那事変以来中国大陸を転戦して、赫々たる戦績を残し、その間、数多くの戦死者を出し、今、ここに来て故郷は原爆で壊滅の敗戦をむかえ、遠い異郷で、いつ来るとも知れない帰還の船を待つ心境は、希望を失った集団と化したのであるが、各人、生き残ったことを幸運と思ひ、健康な体力を維持して、全将兵揃って復員ができるよう、食糧の確保と持久を図り、農耕・漁撈を主体

にした長期休養の心構えで、団結を乱すことなく、心豊かに毎日を消化することに努めざるを得なかった。

野戦倉庫の集積品は一品も余すことなく、各隊に公平に配分給付して、倉庫を閉鎖して建物を各種行事に提供使用させたが、經理勤務班は、衣料の重要な支えであったから、従来にも増して創意工夫が必要になって、最後まで全將兵のために役立ち、むしろ繁忙をきわめることが多く、帰還に際しての個人個人の身辺整理に協力をしていった。

その後は、本土のなりゆきに焦慮しながら、身動きできない島流し同然の無聊を転換するため、定期的に各隊競演の野外演芸会を開き、各隊対抗野球大会・運動会を行って、和氣藹々の気晴しは、生きている喜びをかみしめながら、結構楽しい毎日であった。

我々が居た諸島はインドネシアに属し、オランダ領であるから、オランダ蘭印軍が戦後処理を行うべきだったが、終戦後まもなく起きたインドネシア独立戦争のため進駐できず、豪州が至近の故か、連合軍の出先として豪州軍がその衛に当り、豪軍のL大尉が兵数名と現地人兵補十数名をつれて、武装解除と降伏処理に乗り込んだのは、終戦の日から一か月以上も経過してからであったが、歴戦のつわものどもが武器弾薬を持ってたてこもる孤島に来て、降伏の意志の有無を確かめるまで極めて慇懃な軍使的態度で、こちらの終戦是認の敵意のない対応に

親近感を持ったなごやかな会談が行われ、兵器・弾薬の海中投棄と撤退出発までの不足食糧の供給を約束して帰った。

豪州軍は、大東亞戦争緒戦のマレー、シンガポール英軍の主力として我が第五師団とあいまみえ、降伏させた相手だけに、因果応報の出会いであった。

しかし、中平守備隊司令官は、あくまでも投降の屈辱を回避するため、その後の数回の会談では毅然たる態度で臨み、私は給養の最高責任者としてその都度臨席して、捕虜に対する食糧補給は国際赤十字条約による当然の処置であると要求を通したが、收容所的な捕虜としての取扱いはせず、アル・ケイ・タニバルの三島に分散している部隊を司令部のあるケイ島に全部隊集結して、ケイ島原住民を島外に移し、ケイ島全島で撤退まで自主的に自活し、将校の帯刀、拳銃及び車輛・舟艇関係以外の武器は総て海没し、撤退の時に刀剣・拳銃を埠頭の一か所に残置して乗船する。乗船地点に收容所形式の小屋を作り、乗船の際にこの小屋を通って、持物の点検を受けてから乗船する。埠頭の一地点にL大尉以下が常駐して監視の形式をとる。補給物資は自主的に揚陸して、責任者がレシートにサインして一括して受取る、という条件で合意した。

食糧の請求と受取りは、私が責任者になって各隊保有食糧の現況報告を各隊經理官から提出させ、総人員のカロリー計算を行い、一か月ごとに不足量を算出して請求することをL大尉に

承諾させ、約束通り順調に補給が行われ、カロリー計算で充足された外国人特有の珍品や各種缶詰の副食品と小麦粉を主体とした主食で、恵まれた食生活ができた。

しかし、補給品の中には到着のたびに品種が異なり、オートミール・干しあんず・粉ミルクなど、ほとんど接したことのない物もあって配分には苦勞したが、埠頭に各隊の受領者を集めてその場で配分していたが、日本人食料の劣悪さが身にしみる思いであった。

豪軍のL大尉は英国陸軍士官学校を出た青年将校らしく、終始紳士的言動と誠実さで我々に接してくれたのには、第五師団全員が感謝してあまりあるものであって、私は接触を重ねるに従って会食に招待され談笑するまでになったが、おそらく彼は豪軍の中樞將校に榮進したことと思う。

兵器弾薬は、取り決めの通り自主的に海没することになって、保有していた上陸用舟艇で、数日かかってタニンバル島の沖合に沈め、車輛・舟艇・燃料は、撤退の最終日の輸送が完了の際埠頭に終結して引き渡すことにしたが、銃砲類・戦車は、出征以来辛酸を共にした戦友に等しく、葬送の儀をもって惜別し、敗戦の悲哀を分かち合った。

